
運命と変革～異世界で見た景色～

プラネット

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

運命と変革〜異世界で見た景色〜

【Nコード】

N5128I

【作者名】

プラネット

【あらすじ】

転送機械の実験で異世界に飛んだ伝説の闇、とこの世界で畏れられるミュウツィ。異世界を舞台に彼の隠された物語が始まる。※ポケダンシリーズのピンオフストーリーです

1－1 闇と少年の出会い（前書き）

これはミュウツ－視点の小説です

1-1 闇と少年の出会い

『彼』は復讐を望んでいた。

そのために彼は単身、人間界へと乗り込んできた。しかし、それが彼の運命を大きく動かそうとは……。

辺りは雪景色と化していた。人間界で美しい、という感情に彼は目覚める。いや、感じた……というべきであろう。

「……転移はできた。体に支障は無し、か。上々だ」

フツと笑みを浮かべるミュウツィ。

しかし、そんな彼の表情は誰にも見えはしない。何故なら、今の彼は全身を覆い隠すようにローブを身に纏っていたからだ。

この世界にもきつとミュウツィが存在する——関係ない彼らを巻き込みたくは無かった。そう考えての行動だ。

とりあえず、人間がいるかを確かめたかった。ミュウツィが辺りを散策し出した時、強力な念を感じ取った。

それは深い悲しみの念。その中には憎しみの感情もあった。一言でいうなれば、あまりに重たかった。

「何だこの念は……。重たい。それでいて暗く悲しみに包まれたものの。一片の光すら見えない……。……そう遠くではないな……」

ミュウツィはその念の感じる方向へ飛んだ。

見てみたかった。そんな莫大で、悲しみに暮れた念を発する者を。考え方によれば、世界を食らいかねない程のものだった。

好奇心——そう言っても良かった。

ミュウツーがやがて辿り着いたのは1つの街。街灯があちこちに点いていて、街はお祭り騒ぎのようにも見えるが、人間たちはポケモンや彼氏、彼女など大切な人と想い想いの一夜を過ごしていた。やはり、望んでいた世界だったのか——ミュウツーがそう考える中、その念は一刻一刻と迫っていた。

街道を埋め尽くす多量の人。その中で探していた念を発していた者を遂に見つけた。だが、その顔を特定出来なかった。その原因が人である事には変わりない。

チツ、と軽く舌を打つ。すると、彼は裏路地に避難した。裏路地から回ろう、そう考えたのだが……。

現実はその甘くない。裏路地に向かった事で念が遠ざかっていくのを感じた。辺りは漆黒の闇に包まれ始めていた。

「もう、いいか」

飛ぶ事に躊躇していたミュウツーだが、うまく利用する事で念の元に飛ぶ。

だが、その前に今いる街を全て見たかった。だから、近くにあった物の上に乗って、全てを見渡す。

吹き抜ける冷たい風。当然、人間ならこんなボロボロのローブで我慢できない。だが、彼はポケモン。我慢するなど容易かった。

そんな時。

ミュウツーに気付く事無く、屋上に上がる1人の少年がいた。コイツだ――ミュウツーは遂に見つけた。

この少年が、あの念を発していた。

（コイツ……何か普通の人間とは違う気がするが……気のせいかな？）

その少年から感じた別の念は人間とは何かが違うように見えた。人間なのに、何かある。それを瞬時に感じ取った。

同時にミュウツーは気付いていた。その少年の雰囲気。だから、こう声をかけた。

「人間が憎いか？」

ミュウツーの声が聞こえたのか、少年は後ろを向いた。

「憎い。アカネが。不本意な力を持っただけなのに、悪党に利用され。人並みの幸せすら味わえないのに！なんで何にも知らない奴らだけがそれを味わっているのか！そう考えると、憎くてしょうがない……」

ミュウツーはその少年の言葉を聞き、ある言葉を投げかける。

「ならば、人間を全て消すか？」

「……違う。ほんとに消さなきゃいけないのは。『悪』だ！この世界を利用するだけの存在！そんな奴らがいるから奴らがいるから皆が安心して過ごせない！なら、俺はあいつらを！ギンガ団もロケット団も全員倒す！！」

ギンガ団。

その言葉を聞いた途端、ミュウツーの記憶からある出来事が弾き出された。ギリッ、と歯を立て、眉を顰めた。

そして、口を開く。

「そう思っているのならば、なぜ動かない？動かなかったから、貴様は大切なものを失ったのだろう」

ミュウツーには少年の心理が軽く見透かせていた。少年が大切なものを失った――この程度なら理解できていたのだ。

だから、こちらから仕掛けろ、そうミュウツーは諭したのだ。少年もその言葉には同意できたようだったらしく、屋上を後にした。

1人残されたミュウツーは自らの出生を思い起こしていた。

「完成した！ワシの最高傑作……！！」

カプセルの中にいたミュウツーを見て、そう高らかな態度を取る1人の男。正直、中年男性とでも言って良いだろう。

「さて、コヤツの名前じゃがな……よし、お前さんはミュウツーの……」

そこで与えられたのは種族名ではない、全く別の名前。思い出したくも無かった、そんな名前。

「お前さんは不要じゃ。弱すぎる。いらぬ存在じゃ」

そう言われたのも唐突だった。不要、いらない存在。

全て、この一瞬……この時が今の彼を形成した。憎かった。だが、そんな中……その男のある事だけ頭に入れた。

「博士、我々『ギンガ団』の計画もいよいよですね！」

そう話すのは頭の上が黄緑のお河童男。表現が酷いようだが、あまり言わないで戴きたい。

ギンガ団、それがあの男の唯一の手掛かりだった。この時、ミュウツーは軽く見て帰ろうと思ったが、変えた。

あの男のいる世界かもしれないからだ。

ミュウツーもそう決めると、その建物の玄関らしき場所に降り立った。降り立って1分もしない内にさっきの少年が現れた。足を止め、対峙する。

「……まだなんか用か？」

「貴様に付き合えば、ギンガ団に会える。貴様の復讐に付き合っ

やる」

勿論、この言葉には嘘偽りこそ無い。しかし、一方でミュウツーもまたギンガ団に野暮用があった。少年は言い返す。

「……好きにしろ」

ミュウツーは少年と共に歩き出した。

憎んでいた人間との旅、これが彼の運命を揺るがす引き金になるうとは……。

1-2 湧き出る興味（前書き）

かなりキツイ（汗）

ミュウツー「明日で良いじゃないか」

弟に取られてまともに出来ないだろうから嫌。

ミュウツー「お前は子供か（汗）」

1-2 湧き出る興味

少年と歩いて早3日足らず。

多くの人を捕らえた。だが、ミュウツ―はそれをわき見で見物している程度である。当然、ローブを被っているから多くの者が彼の助けを待った。だが、ミュウツ―はそれを絶対に受け入れはしなかった。

全ては復讐のため。

そして、あの人間を探すために……。

森にバイクで逃げていく人間。彼の持っていたポケモンは少年が全て薙ぎ払った。今日もまた、ミュウツーは見物人と化していた。

少年の後ろには無数のポケモン達が並ぶ。きっと彼の所持するポケモンなのは容易に頷けた。

バイクが転倒し、男に問い詰める少年。少年から感じるのは負の感情だ。

その中でギンガ団に関する情報が手に入った。だが、少年がそれで許すわけが無く、男を殴る蹴る、と暴行を続ける。ポケモン達はただ見る事しかできない。中には目を背ける者もいた。

男がミュウツーに助けを求めた。

「お、お前！助けてくれ！！このままじゃ死んじゃまう！！」

だが、この男に対し、冷徹にもミュウツーはこう告げた。

「俺が貴様を助ける理由がない。俺は貴様が知っているであろう、『ギンガ団』の情報にしか興味は無い。何より、貴様が『人間』である時点で助けるに値しない。」

「そ、そんな!!」

男が絶望に暮れる中、少年は男の顔を木の幹に叩きつける。男の顔面からは血が零れ落ちていた。

ここ2、3日一緒に旅してミュウツーは人間の黒い部分だけ見た。だが、それが人間の全てだとミュウツーは思い込んでいた。少年がポケモンやミュウツーに向かって言う。

「……さて、次に行くぞ」

ミュウツーが歩こうとした時だった。

(何かが凄まじい速度で駆けて来ている……一体なんだ？何かがここに向かってきていると言っても言うのか?)

少年にミュウツーは忠告するように、こう告げた。

「……待て。何か近づいてるぞ」

それとともに少年のラティオスが強引に出て、そして空からデオキシスが、陸からエンテイが現れた。

速度的にもミュウツーはどこか納得していた。

少年が男の襟を掴みながら伝説のポケモン達と対峙する。

「……何の用だ、貴様ら」

そう言った少年にエンテイが吠えるように言った。

「クロノ! そのローブの者から離れろ! そいつはこの世界の住人ではない!!」

もうばれたか、ミュウツーはそんな事を不意に考えていた。感が良い連中……そんな感情も湧き出る。

同時に少年の名も聞いた。クロノ。それが少年の名だった。

クロノがミュウツーにその目を向ける。しかし、彼の返答はあまりに意外だった。

「だから何だ？こいつが誰で有ろうと関係ない。こいつが、俺の復讐に力を貸してくれるというならばそれで良い」

それに真っ向から反発したのはラティオスだ。腰から出たり、このラティオス自身にもニックネームがある事から彼のポケモンなのが頷ける。

「クロノ！復讐に何の意味も有りません！貴方は自分のポケモン達の手も血で染めても良いんですか！？」

そう言うときクロノはポケモン達を見る。確かに彼のポケモン達は震えていた。

するとクロノは有り得ない言葉を吐いた。

「……今の俺に着いて来れない奴は消えろ。来る奴だけ前に出る」

これを彼をよく知る者が聞いたらどう思うだろうか。ミュウツーもこの言葉でこの場を去るポケモンがいると思った。

それはクロノのポケモンを見ていればよく分かる。

しかし、クロノのポケモンはミュウツーの予想に反し、皆が揃って前に出た。

信じがたい光景だった。3日間、クロノがポケモン達にした態度や

指示は今までに無いやり方だったとミュウツーは予想できた。
しかし、クロノのポケモンは彼と離れる事を拒んだ。

（半分は消えると思ったが……。こいつは他の人間と何が違う？）

頭の中にインプットされている人間と今、現実にいるクロノ、という人間は結局なら変わりはしない。

ポケモンを『道具』としてみている。なのにクロノは他の者とは何か違うものを感じた。

信頼など――何が何でも受け入れたくない。現実には彼は、人間に見捨てられた存在。人間と信頼関係など結びたくも無いし、それを認めたくも無かった。

だが、目の前に見えるこの光景をどう言えばいいのだろうか？『信頼』以外の何も思いつかなかった。

「これが答えだルイン。貴様はどうなんだ？」

クロノがルイン、というラティオスに問う。ルインの答えはこうだった。

「たとえば貴方のポケモン達が貴方を慕っても、私は今の貴方にはついては行けない！だから、私は貴方を止める！！」

ルインはそう言う構え。エンテイも同様に構えた。

「人間。キサマには、失望した。エンテイ達のハなしでは、この世界ヲマカせるニたる存在ダと思ッたが、今ノキサマでは世界ヲ壊ス存在。止めさせモラウ」

そう言うデオキシスは攻撃型――すなわち、アタックフォームへ

とその姿を変えた。

「止められるものなら、やってみろ」

クロノを守るべく、クロノのポケモン達も前に出て構える。

しかし、ミュウツーはこの一瞬、デオキシスの言葉に妙な疑問を抱いていた。

（世界を任せるに足る存在？まさか……コイツがか？）

伝説のポケモンがそう言う存在。少しばかり興味が湧いた。ここでクロノに死なれては困る。

ミュウツーがクロノのポケモンの前に立つ。

「……余興だ。少し相手をしてやろう」

そして、クロノにこう言った。

「貴様ばかり暴れるな。たまには俺にも暴れさせろ。それに、この世界の『神』達の実力も知りたい」

そう言い切るミュウツー。何故、ポケモンが人と歩むのか——その答えが見つかるかも知れなかった。

しかし、エンテイがそこに食い付く。

「異世界の住人！貴様がなぜこの世界に来たかは知らぬ！だが、貴様の存在はこの世界を狂わす！おとなしく元の世界に帰れ！」

ミュウツーに重圧をかけているようだが、一切ミュウツーは動じない。むしろ、弱い者ほどよく吠える……そんな言葉があった事をミ

ユウツーは思い出した。

だが、そんな事を口には出さず、こう返した。

「まだ、『答え』を見つけていないのでな。まだ帰る訳にはいかないな。どうしても返したいなら、力づくでやってみろ!!」

否、4体が動いた。

实力を見るのに、本気を出す必要は無かった。せいぜい10%もいらないだろう。

デオキシスの腕がローブを掠める。

エンテイの炎は軽々と避け、ルインのラスターパージはローブを靡かせる程度だった。

歯ごたえが無さ過ぎる。あまりに弱く、その弱さに失望した。これなら、この前対峙したデルタとか言うリオルやジュプトルらの方がよっぽど歯ごたえがあるように感じた。

「……もう少しやるかと思ったが。興ざめだ……。消えろ、弱い神共が」

するとミュウツーはローブから特徴的な手を出した。クロノには見えていないようである。

自身の持つ闇がその手を覆い被さっていく。

「ダークブラスター」

「「「!!!!!!」」」

放たれたその恐ろしい技を避けきれないと悟るデオキシスがディフェンスフォームで防ごうとするが、そんな簡単なガードに防がれる

ほど、この一撃は甘くない。

あっという間にデオキシスのガードも破り、全てを飲み込んだ。

残るはその巨大な爪跡。

きつと明日頃にはニユースになっているだろう。森の木々は消え失せ、何も無い、荒野へと様変わりしていたのだ。この異変に気付かない者はいないだろう。

だが、率直に思った事が口に出た。

「……弱い。弱すぎる。この程度で、神とは」

「……お前は何だ？」

一部始終を見ていたクロノが聞く。

確かにあんな一撃を放ったんじゃない、そんな問いが来るのも当然だが。

「……それが分かればこんな事はしていない」

ミュウツーはそれしか答えなかった。

あの男の言っていたヨスガ、という街へ向けミュウツーとクロノは歩く。

その中で、ミュウツーの中に若干の迷いが豆粒のように小さいものの、生まれていた。当然、そんな事にミュウツーが気付くはずもない。

「ほれ……今日の晩御飯じゃ」

その男が出したのは妙な形をした食べ物だった。

『?』

あの頃は赤ん坊のようでまともに人語を話せなかったミュウツィ。
男はこう言った。

「これはの、お主らが美味しい、と感じる食べ物なんじゃ。どれ、
食べてみるかの？」

男がゆっくり、ミュウツィの口に食べ物を入れた。その味は確かに
絶品だった。男もまた、笑顔で食事を取る。
賑やかな家族。ミュウツィの中にあった一時の幸せ。しかし、それ
が今では思い出したくも無いモノと化している。

あの男は……この世界にいたのだろうか？

ミュウツィの中で怒りと、もう1つ何かがゆっくりと高ぶりを始めて
いた。

1-2 湧き出る興味（後書き）

ミュウツー「私の過去が少しずつ浮き彫りになってるな」

まあね。

ミュウツーの秘めし過去。これが物語にどう響いていくのか？
そして、ミュウツーが捜し求める男。

分かる人いたら凄いですよ（笑）

1-3 人間（前書き）

今回はかなり重要なワードが飛び出ます。

ミュウツー「まさかとは思うがな・・・」

そのまさかだ。

1-3 人間

ミュウツーとクロノはヨスガをただ目指していた。

だが、流石に冬の夜は人間には酷だし、まともに休めてもいなかった。ミュウツーは洞穴にクロノを連れ込んで、休みを取る事にした。

戦った伝説のポケモン達がどうなったかはどうでもよかった。それより興味があるのはこの人間とポケモン。

火を点ける事で暗い洞窟に光が灯る。終始無言の2人。目的の為に手を組んだくらいだったので必要以上に知る事も無い。現実ミュウツーにとって、この出会いは一期一会にも等しいから尚更である。

「……先日、デオキシスが言っていた『貴様に世界は任せられない』と。貴様は何者だ?」

知る必要も無かったはずだ。

なのに、開いた口。クロノはミュウツーを横目で見て、こう返す。

「……この星を作った神様は、この星にいる人間の存在理由に疑問を抱いたらしい。そこで、人間の代表として、俺達と話してこの世界の行く末を決めるらしい。多分、デオキシスが言っていたのはその事だと思う」

「随分と人任せな神様だな」

それが今の本音だった。

神なのだから、とっとと決めればいいのに……そんな事を考えていた。

クロノからの返事はなく、変わりに小さな寝息が洞窟に響く。疲労が溜まっていたのだろう、ミュウツーは黙ってその寝息を聞いている。

た。

そんな時、彼の腰のモンスターボールからクロノのポケモンが現れた。ガラハット、と呼ばれるサンダースがクロノの膝の上に乗って、クロノの暖となる。

トリスタン、と呼ばれるマニユラとパロミデス、と呼ばれるガブリアスが入口を塞いで、冷気が流れ込むのを防ぐ。他の者もクロノを寒さから守るために寄り添った。

有り得ない……ミュウツールの感情はそれで満たされていた。ここ数日していたクロノの指示や様子からして、この人間になぜそこまで執着するのか、疑問でしかなかった。

だからこそ、ミュウツールは彼らに問いかけた。当然、ポケモンの言葉で。

「……貴様達。どうしてそこまでその人間を慕う？ そいつは貴様達を道具のように扱っているのだぞ？」

そんな問いに答えたのはバシャーモのガレスである。

「たしかに、今のマスターを見ただけでは分かりません。ですが、昔のマスターを知っているからこそ、今を耐えられる。それだけです」

そう言うとかレスはクロノを見つめた。

幸せな光景がミュウツールの目に映る。

（これが真の姿……。人間とポケモン……か）

ふと、外に出たくなった。

ミュウツーが立つ。

「どこに？」

ガレスが問いた。

「考え事だ」

そう言うと、ミュウツーは静かに洞穴の外へ体を動かす。近くの木の幹に体を任せ、ふと昔の記憶を思い起こしていた。しかし、浮かぶのは不必要といわれ、妙な機械の中に閉じ込められたあの時。

ミュウツーの中でこの時、忘れていたあの名が頭を過ぎった。同時に感じる同調感。それは自らと同じ者の波長である。

「『シャイン』……。何故今になって急に思い出すんだろうな？」

自問自答。

それが今の彼に出来る最善の行動だった。

「……そんな事はどうでもいいか。だが、クロノに聞いてみるか……。何があったのか」

自らと同じ瞳、雰囲気をしていた1人の少年と話をすべく、ミュウツーは洞穴へ戻った。

辺りは銀世界と化し、人間界という、新年は幕を開いた。

ミュウツー自身がわずかながら、自らの変化に感づきだしていた――。

1-3 人間（後書き）

ミュウツー「変化だと？」

あんまり感づいてないみたいだけど（笑）

今回出てきた『シャイン』という言葉はまた出ます。かなり重要な語句ですよ。

ミュウツー「……思い出したくも無い」

そうっすか（汗）

1-4 自らの分身（前書き）

今回はこっちのミュウツーとあちらのミュウツーが……。

尚、今回の話は許可を貰い、あちらの話を少し先に進めています。

1-4 自らの分身

ミュウツーとクロノは2人、雪の積もる森を歩いていた。目的地はヨスガ。人間界の地理には疎いので、ミュウツーの道案内はクロノのようなもの。クロノに頼る他無かった。

空を飛べるなら早いものの、そうするわけにもいかない。ミュウツーが前方を見ると、1人ブツブツとしているクロノが目止まる。

「何をブツブツ言っている？ヨスガにはもう着くのか？」

ミュウツーがそう言うと、クロノは小型の機械を取り出した。ミュウツーの顔は見えていない。

今更ではあるが、ミュウツーはローブで素顔だけでなく、体全体を隠しているため、クロノには正体を一切知られていない。

ミュウツーとしては自分の正体を明かす時が来ると理解していたが、今はそれ以上に聞きたい事もあった。

「通常の道を使えば、後1日程度だが、森を歩くと早くて2〜3日はかかる」

気が遠くなる話だが、両者共に白昼堂々と歩ける者同士ではない。故に遠回りして近づくしか術が無いのだ。

森で少し休憩を取っていた時、ミュウツーは今1番聞きたい事をクロノに聞いた。

それがポケモンと人間の関係の類の質問なのは言うまでも無い。

「……貴様のポケモンは随分と貴様を信頼しているみたいだな。貴様はポケモン達に何をしたんだ？」

クロノは不意な質問に意表を取られたようだった。

クロノは腰に着けていたモンスターボールを1つ取った。それはアレスタン、と呼ばれるボーマンダが入っているボールだ。

「こいつは、タツベイの時、群れの中で一番弱かったんだ。……どんな、トレーナーもこいつには見向きもしなかった。群れからも、人からも見られなかったんだ。そんな時、俺がこいつらの群れに出会った。喧嘩も弱くて、いつも泣かされていた。でも、こいつは群れで一番、飛ぶ事を夢見てた。だから、俺はこいつが自由に飛べるように手を貸してやった。それからさ。こいつと俺が旅を始めたのは」

ミュウツーはそれを聞いて、ある質問を飛ばす。何かを得るには相応の代価を支払う。それが世の掟。暗黙の了解。クロノがそのタツベイを苦勞して育てるのを代価とすると、その分何かを得たいものである。

それは人間だろうが、ポケモンだろうが代わりはしないはずだ。

「……その時、貴様はそのボーマンダに恩返しを期待して手を貸した訳ではないのか？」

その問いにクロノは少し笑った。

その瞬間、まさか——と思った答えが返ってきたのだ。

「お前が人にどんな、認識を持ってるか知らないが、少なからず、当初の俺はそんなことは望んで無かったな。ただ、こいつが自由に空を飛んでいる姿が見ただけさ。今じゃ、こんなにでかくなっちまって」

有り得なかった。

人間は、ポケモンは皆強いものを求めて行動する。ボーマンダ、といえど配下のマンダがいるから多少分かるが、かなり強い。だが、クロノがアレクサンを仲間に加えた理由はただ、空を飛んでいる姿を見たかっただけ。

到底有り得なかった。彼も少し人間のポケモンとバトルしたが、こぞって強いものに執着していた。それは今、彼が住まうあの世界でも変わりはない。

しかし、クロノが続々とポケモン達の紹介をする事でその思いが本当なんだ、と理解できた。

いや、理解せざるを得なかった、と言うべきであろう。認めたくないが、認めるしかなかった。

そして、いよいよ本題をクロノに問う。

「貴様に聞きたい。人とポケモンは共存できると思うか？」

それを聞いた途端に笑顔だった表情が消え、クロノは沈黙した。

ミュウツーはその時、何かが少しずつ近づいていた。似た波長が2つ。2つは有り得なかった。1つならまだしも……と感じる。

クロノが口を開いた。

「……俺もその答えを探してる。人間は酷く愚かな生き物だと思う。でも、全ての人間が愚かじゃない。でも、人間の大半は、ポケモンを悪用している。ギンガ団やロケット団もそうだ。そんな奴らが居る限り、人とポケモンに共存は有りえないと、俺は考える」

クロノの意見を黙して聞くミュウツー。

そこに余計な事は挟めなかった。彼もギンガ団やロケット団と似た

ようなものだから、というのもある。逆に自分もポケモンを引きつれ、復讐のたけに行動している。

結局、自分も妨げをしているのだと、少しながらの罪悪感を感じていた。

そんな時。

「その考えは少し、違うと思いますよ主よ」

木の陰から金髪を靡かせた少年が現れる。主、というところからクロノの知人なのはすぐに分かった。

しかし、同時に似た波長の元凶が分かる。この人間だ――だが、人間が何故ミュウツーと似た波長をするのか疑問だった。

「……新年明けまして。が、挨拶か？」

「こんな形でのお会いではなければ……」

金髪の少年の背後からやって来る無数の人間。

何者かと、問いたい。その人間たちにクロノは皮肉混じりの一言を言い放つ。

「新年早々、御苦労さま」

クロノの横にミュウツーが立ち、金髪の少年に問う。

「貴様らは何者だ？こいつの知り合いのようだがな」

「先に名乗るべきはそちらではないですか？」

金髪の少年はそう返す。

ミュウツーはそれにこう返した。

「『語られし者』……とても言おうか？ 異界では伝説に語られているのでは」

勿論、この言葉で金髪の少年やクロノが正体は伝説のポケモン系だと少しは悟ったのかもしれない。

だが、これは当然彼を知るものからすれば別の意味である。

全てを滅ぼそうとした、その忌まわしき伝説の『闇』だと――。

「クリアスⅡキャスパニア」

金髪の少年はクリアス、と言った。背後の8人も聞こうと思ったが、色々面倒なものがある。わざわざ聞くまでも無い、そう諭せた。

「では、1つ聞こう。何故追ってきた？ 止めさせたいのか？」

「当然です」

クリアスの答えは2つ返事も当然。

「俺は止める気はない。邪魔をするな、クリアス」

クロノを横目で見るミュウツー。クロノの答えを聞き、ミュウツーはこう言った。

「だそうだ。それでもか？」

「勿論です、主を取り戻します」

クリアスを取り出すはモンスターボール。どうやら、力づくのようだ。

そんな時、クリアスが持っていたボールを腰に戻し、別のボールを取り出した。そのボールには『R』のマークが描かれており、漆黒に染まっていた。

「頼みますよ、ミュウツー」

「――!!?」

衝撃だった。そのモンスターボールから出でた者は紛れも無い、自らの分身。

同時にこの世界のミュウツー。

「……お前の相手は私がやろう。来い」

堂々と告げたミュウツー。クロノは何も言わなかった。

何故かは知らないが、複雑な心境にいるのは間違い無かった。それはきっとクロノも一緒だと、理解している。

間違いなく、この世界のミュウツーはこちらの正体に感じているし、仮に戦闘になったら、双方に被害は免れない。それを計算しての移動である。

「……この辺りでいいか」

ミュウツ―が足を止める。後ろについて来たクリアスのミュウツ―もまた、その足を止めた。

「感づいているのだろうか？」

「ああ」

それを聞くと、ミュウツ―は軽く息を吐く。ため息である。正直、こんな形で合間見えたくもなかったであろう、双方。

「ここに留まるワケもなら分かるな？」

「大体はな」

この時点で双方の意見が決して交わらない、そう悟った両者が距離を取る。

「我が同胞なら少しは話がまともに出来るかと思ったが……仕方あるまい」

「エンテイ達を薙ぎ払ったらしいな？」

「生きていたか。まあ、半ばそうなるように仕向けたがな」

どうやら、あの時のダークブラスタでエンテイ達を生かす気でいたらしい。それは同時にある牽制へと繋がる。

『クロノと自分に近づくな、同じ目に遭うぞ』というメッセージを。

「相当なやり手らしいが、我は同じようにはいかん。いくぞ！」

クリアスのミュウツーが一気にミュウツーに迫る。当然、ミュウツーは一切本気ではない。この前と同じ10%程度で充分だと思っていた。

しかし、それが甘かった。

「波動弾！」

腹部があらうであるローブの部分に波動弾を放つクリアスのミュウツー。しかし、直撃の寸前、ミュウツーの姿が消失した。

クリアスのミュウツーが辺りを見渡す。ミュウツーは何と、クリアスのミュウツーの背後に立っていた。

「速い……！」

「速いだと？この程度、普通だがな」

「何だと!?!」

それを耳にしたクリアスのミュウツ―は即座に距離を取る。

「この前の3匹よりはまだ楽しめそうだな、10%程度で充分だったからな」

「10%!?!」

クリアスのミュウツ―は更なる衝撃を受ける。あのボロボロのエンティ達を間近では見てないが、相当な傷だったらしく、本気でやったと思ひ込んでいた。

しかし、それは大きな間違いであった。このミュウツ―の力は我々を大きく凌駕している――そうクリアスのミュウツ―は感じ取った。

「では、こちらからいかせて貰う。波動弾!!」

「ならばこちらも波動弾!」

2人のミュウツ―が同時に波動弾を放つ。2つのエネルギーが相殺しあうが、ミュウツ―は次なる一手を打っていた。

「ひれ伏せ、シャドーシャワー!!!!」

クリアスのミュウツ―に放たれる無数のシャドーボール。連続攻撃のレベルを遥かに超える攻撃量だ。しかし、クリアスのミュウツ―も天下一品だろう。全てのシャドーボールを紙一重とは言えども、避けていく。

「ほお、少しはやるな。ならば、見せてやろう」

ミュウツ―が片手を前に突き出す。そこに凝縮される莫大なエネルギー

ギー。片手でもその集まったエネルギー量は莫大。もろに受ければ、一溜まりもあるまい。

「喰らえ、ダークバースト!!!!!!」

そこから放たれた極太の闇に満ちた一撃。クリアスのミュウツ―は射程範囲をギリギリで避けていたがため、何とかなったものの、その威力に冷や汗をかいていたのは間違いないだろう。ミュウツ―は今度、両手で構える。

「何!? 両手だと!」

「片手の威力は見ただろう? ならば両手版は直に受けてもらいたいな。これで決着をつけたいのだからな」

ミュウツ―の両手から放たれた先の一撃より膨大な範囲のエネルギー。当然、その一撃を避ける事は不可能であった。

「……まさか、間一髪であれを避けるとはな……」

少々驚きを隠せないミュウツ―。しかし、クリアスのミュウツ―は木に身を任せ、肩で呼吸をするほどである。

「この世界の我は、こんなものか?」

見下すような感じでミュウツ―はクリアスのミュウツ―に問う。だが、クリアスのミュウツ―は何かを悟ったようで、ミュウツ―を鼻で笑う。

「確かに貴様は強い。しかし、我は貴様の探している答えの断片を知っている。貴様が疑問に思っている、答えの断片をな……」

「戯言を……」

「戯言かどうかは貴様が一番よく分かっているはずだが？ 我には貴様が『答え』を探しているように感じるが」

その瞬間、大地が揺れる。さしものミュウツーもこの不意な現象に意識を取られる。次に意識をクリアスのミュウツーの方に向けると、そこに奴の姿は無かった。代わりに森に響く敵の声。

「また会おう。異界の我よ。次会うとき、再び相まみえよう！」

それは紛れもなく、クリアスのミュウツーの声。

フツ、と彼もまた笑う。ローブの内にあった異変を隠していた彼はこう1人で呟いた。

「面白い……次は本気でやってやる。私にあの1回の攻撃で傷をつけたのはお前が初めてだからな」

そう言うミュウツーの腹部にはクリアスのミュウツーが放ったであろう、あの波動弾の傷がとても小さいものの、残っていた。

1-4 自らの分身（後書き）

ミュウツー「中々面白い奴だ」

結局勝っちゃうし（汗）

ミュウツー「まあ、クロノとクリアスとやらがどうなっているかは私にも分からんがな」

そうっすね（滝汗）

てか、大丈夫なのかな？これで……。

ミュウツー「早くせんか!!」

1-5 空の上で(前書き)

今回はまたまたミュウツールの過去有ります。

1-5 空の上で

辺り一面を凄まじい揺れが襲い、結果としてこの世界のミュウツーとの勝負はお預けとなった。

中途半端な結末に舌を打つも、一方で好敵手ライバルともいずれ呼べそうな存在に心を僅かに躍らせていた。

ミュウツーは先の場所に戻っていた。無論、徒歩。

そんな時、ミュウツーの歩く進路から飛ぶムクホーク、ボーマンダ、フライゴンの3匹。

フライゴンの背にはクロノと見慣れぬ男が乗っていた。

ミュウツーがボーマンダのアレスタンの背に飛び乗る。

それを見た男がミュウツーにこう言った。

「すごい跳躍力だね、お宅」

無論、ローブを着ているからその正体は掴めていないものの、空を飛ぶポケモンの背に飛び乗るなど、かなりの荒業。それに男は感心していたのだ。

「貴様は？」

「ん？ おっちゃんは星。しがない情報屋。……ひとまず、この場を離れるけど異存は？」

ミュウツーは答えなかった。

代わりに星の後ろにいるクロノを見つめていた。何かを失ったような……悲しみに暮れた涙。

それがよく見えはしなかったが、星という男も感づいていたようだ

った。

「……落ち着ける場所に連れていけ」

「はいはい」

やる気無さそうに星が答える。

今のクロノを見ていると、あの頃の自分を思い出すようで嫌気が射す。だが、同時にクロノに対する同情心も芽生えていた。

——たかが、人間如きに何故ここまで……。

彼は自らの理想と今の現実の狭間で苦しんでいた。あの時の1番憎いものが頭でリピートされる。

『ねえ！？どうして！！』

幼きミュウツーは周囲をガラス管で覆われていた。突然、あの男が押し込んだのだ。

バトルは何度かしていたが、負け続けである。しかし、それでも双方共に笑顔は絶やさなかった。なのに、何故突然――。

「お主は弱すぎる。少しは使えると思っていたが……利用価値すら見出せぬ役立たずは必要ない！今、この場でお主の存在を消去する……」
デリート

男の言う事、全てを理解するのは無理だった。

だが、今の彼なら理解できる。しかし、男はこう告げなোস。

「まあ、殺すのもなんじゃ。せめて生かしてやろう。一生、会えんがな」

男がレバーを引くと、その部屋にあった全ての機械が動き出し、ミュウツーの姿は消失した。

彼がやったこの行動が、全ての引き金である――。そう、この時、ミュウツーは100年前のアルツ達の世界に流れ着いたのだ。

「弱いから、捨てる……一体何のために！？何のために人間は生み出したんだ！？」

憎んだ。この時、全ての世界を、全ての生命を。そして、人間を。とことん、利用され使えないから捨てる……理不尽な人間に腹が立った。復讐、逆襲。それしか彼の頭に無かった。

「思い知らせてやる……人間共!!!!!!」

幼きミュウツーが復讐を誓った、瞬間。

同時に彼の瞳からは涙がこぼれていた。捨てられた悲しみ、様々な
思いが込み上げてきての、そんな涙。

ミュウツ―はある事を問う。

実はミュウツ―はある理論を作っていたのだ。

それは異世界同士の調和。100年前、世界を滅ぼさん、と行動した彼だが本当に全ての世界でそんな事が起こったのか、疑問視していたのだ。

「星、とか言ったな。聞きたい事がある」

「何？」

「この世界で世界存亡を賭けるまでの出来事はあったか？」

うっ、と息を呑む星。

あまりに唐突な質問故にこういう動作は仕方が無かった。

「そうだねえ、やっぱりルネの出来事かな？」

「ルネ？」

「ここはシンオウって地方だ、で、今言ったルネってのはハウエンって地方にあるんだよ」

「ほう……。詳しく聞かせてくれないか？」

ミュウツ―はやはり、自らの理論は的中しているのではないかと、想像した。

「いや、おっちゃんよりは少年の方が詳しいと思うよ」

そう言うと、星はクロノに目を向ける。

ミュウツーもまた、クロノに目を向けたが、クロノの現状を考える
ととても聞き出す気にはならなかった。

「まあいい。いずれ聞き出す。私は、ある理論を持っていたな、そ
の理論がやはり正しい……と私は思う」

「ふーん、その理論、聞かせてもらいたいね」

星も若干興味があるようだったし、ミュウツー自身もまた話して別
に構わない事だったから話す事にした。

「全ての異世界には、破れた世界……まあ、正しくは反転世界だな。
そういうものが存在する。しかし、反転世界はその世界のバランス
しか保てない」

「難しすぎないか？」

「簡単に言うのだな、自分たちの問題……小さな出来事なら、反転
世界を巻き込む程度で片がつく。つかなくなるパターンも無くは無
いがな」

ミュウツーはその補足説明の後も続けて言った。

「では、反転世界では抑えきれない……つまりは貴様らの世界のル
ネの話にまでなると、異世界に影響を及ぼす。形は違えど、似たよ
うな事が起きかねないのだ。分かるな？」

「まるで病気だねえ」

「そう感じていて構わん。そして、今回の出来事……異世界により、
時間の経過は違う。結果論から言えばその元の原因は……私たちの
世界にある」

「お宅の世界に!？」

星の印象もだが、クロノもこの一言には若干の動揺が見られる。

辺りは霧に囲まれだした。

「ちょうどいいね。どっかの洞窟で詳しく聞かせてもらおうじゃないの」

星がそう言う。異論は何1つ無かった。

果たして、洞窟の中でどのような話が起ころのか――。その時、3人が考える事とは――？

1-6 もう1つの名(前書き)

今回はミュウツーの過去ばかりです。

また、最新の黒と白の想いを見ていないと話にはついていけないと思います。

1-6 もう1つの名

3人はトバリへ向かっていた。

星の助言により、ギンガ団のアジトがトバリにある事が判明したからだ。終始無言。その中でミュウツ―はある名を使った事に若干の後悔をしていた。

憎き、あの人間から授かったもう1つの名を――。

「お主をミュウツー、と呼ぶのは嫌じゃしな……」

生まれたてのあの日、自らを作ったあの人間は顎に手を当て、辺りを行ったり来たりしていた。男曰く、ミュウツーといえは何かしら騒動が起こる。

身勝手に作った命と言えど、そんな目に遭わせたくない。故にニックネームをつける事で極力回避しようとしたのだ。勿論、新種のポケモンらしい、と嘘を付きながらそのニックネームを流用していくつもりでもある。

「……むっ、朝か……」

男の部屋に差し込む朝日。

それがミュウツーにとって初めての朝。紫色の瞳が朝日の中で輝く。純粋な瞳だった。

そんな姿を見て、男はこう閃いた。

「そうじゃ！お主の名は『シャイン』！シャインにするぞ！！」
『シャイン？』

生まれつき、頭が良く働いたミュウツーはその意味を知りたい、と顔に出す。男はそれを見て分かりやすく説明した。

「シャイン、とはちよつと意味が違うこそ、太陽、と言う意味なんじゃ。太陽の陽射しは人もポケモンも明るくし、そして同時に生きる活力ともなる。人もポケモン……いや、この世の全てにおいて、太陽は無くってはならぬ存在じゃ。お主には周りを太陽のように明るくし、そして元気付けてほしいのじゃよ」

意外にも名づけた理由は驚きだった。

これは今のミュウツーにも言える。利用するだけの存在に何故、愛称をつけたのか——今でも疑問である。

「シャイン！念力じゃ！！」

男が指示をする。ある日のシャインのバトル特訓だった。対戦相手はコラッタ。コラッタが前歯を剥き出しにして迫る。必殺前歯だ。

『う、うん！』

ミュウツー——いや、シャインの目が青白く光るが、それは僅かに一瞬。コラッタをコントロールできずに必殺前歯をもろに受け、シャインは目を回して倒れた。

コラッタを使っていた男がシャインの作り主に言った。

「そいつ、いくら何でも弱すぎるだろ、もっと鍛えたらどうだ？この辺りのトレーナー相手にそれじゃ話にならねえぜ？」

今の彼を知る人はきつと驚きを隠せなかっただろう。あの強大な力を持つ者が始めはコラッタにすら手も足も出なかったのだから。しかし、作り主はこう反論した。

「負けてから知る事も多い。ワシらは今それをしておるのじゃよ。フオッフオッフ」

不気味な笑みではあるものの、それは見方を変えれば大事にされている証拠でもあった。

そう、この時の彼は確かに人間との信頼関係を結んでいた。それが壊されたあの日、彼は人間の全てを否定した。

人間はポケモンを利用し、やがていつかは捨て去る非道な存在。

同時にポケモンを支配する兵器を作り、さらにはポケモンに命令し、自らは指示するだけ。

ポケモンバトルなど所詮はただの人の娯楽。ポケモン達に最終的に残るのは体の傷だけ。最早、ヒトなどこの世には置いておけない存在だと、彼は思う。

その日、シャインー―いや、ミュウツーは人から与えられたシャイン、という名も捨てた。
それが彼なりの決別。

しかし、またこの名を使う事になるとは今考えれば思っても見なかったであろう。

「トバリだよ」

星がそう言った。先の話で飛ぶアルセウスの名。

星は過去から来た人。そして、神の断片を持ちし者。今思えば改めて星にはどこか引かかっていた。それをあの時理解したはずだったが、いつそれに引かかりだしたか疑問にも思っていた。

ミュウツーと星はフライゴンに、クロノはアレスタンに乗り、トバリ近隣へやって来た。

「ところでシャインさんよ。お宅一体何者なんだ？」

星が静かに聞く。ミュウツーはフツ、と静かに笑うとこう返した。

「別にいいだろう？お前とて正体を隠していたのだからな。いずれ来る別れのときにでもなったらこのローブを剥いでやる」

その返しに星はつまらなそうに、

「あっそ。じゃ、おっさんは楽しみにしとくよ」

「ここからは歩くぞ」

響くクロノの声。

フライゴンとアレスタンが地上に降り立つ。

彼の話した別れの時、それがいつ来るか一切分からなかった。
ただ、ミュウツー……いや、シャインは感じ始めていた。別れの時
はそう遠くないであろう事を。

1-6 もう1つの名（後書き）

シャイン「思い出したくもないし、使いたくも無かったな・・・」

はいはい、もういいから。

因みに使った理由ですけど、これは出来れば本編中に明らかにしていきたいと思ってます。

最悪、この後書きに書きますけど（笑）

1-7 知る正体と揺れる世界（前書き）

今回、いよいよ謎の男の正体が判明します！

シャイン「・・・そうか」

暗いね？（汗）

1-7 知る正体と揺れる世界

有耶無耶していた、あの男の姿。

何せ、シャインにとつては遠い昔の話。完璧に記憶できていたらそれはそれで恐ろしいものがある。

だが、プルート、という男を見てどこかはつきりしていた。

あの男もプルートに良く似ていたのだ。いや、似ていたのではなく
もしや……という感情が目覚める。

それが核心に変わるのも時間の問題だと、シャインは考えていた。

「……消えろ人形風情が！」

怒りに満ちるシャイン。

彼の前には心の無きミュウツー達、nomind達が立ち塞がる。
その数は相当なものだった。

正直、何体いるのか彼にも予想できないのだ。

『波動弾』

全てのnomindミュウツーが一斉に波動弾を放つ。

迫る波動弾の数は半端ではない。ここは耐えるしかなかった。

「バリアー」

シャインのバリアーは昔から強力で、物理のみならず特殊攻撃――
すなわち、遠距離攻撃にも対応が効く。それが彼自身を何度助けた
か……言い出せばきつとキリは無いだろう。

しかし、このnomind達は彼の怒りを引き出す存在でしかない。
一気に潰したいが、何せ数が半端ではない。

下手に動けば、こちらがやられかねない。それにクロノや星もここ
から脱するのは簡単では無くなるだろう。

「雷」

手から放つ稲妻が数体のnomindミュウツーの体を粉碎してい
く。しかし、粉碎された体は一瞬にして元に戻った。これにはシャ

インも驚きを隠せない。

迫る波動弾。いや、それだけではない。シャイン自身、体が重く感じていた。原因は簡単、nomind達のサイコキネシスだ。

チツ、と本気で舌を打つシャイン。最早、手加減してはいはこの無数の敵には勝てそうに無かった。実力が衰えたのではない、ただ、怒りが彼の判断を狂わせ、数が彼の動きを抑制し、重いが彼自身の強さを押さえ込んでいたのだ。

（もう、これほどの敵を相手にするのは面倒だ……一氣にカタを着けるか）

否、シャインは地に下りる。ここにいるのはクロノ達以外はギンガ団。容赦は必要ないと判断した。

揺れだす大地。無心のnomind達も動きがピタリ、と止まる。

その時、シャインから感じたのはおぞましい覇気。心は無い。しかし、自然の摂理はそう簡単には断ち切れない。弱肉強食、それが世の統べる全て。

nomind達は完全に恐れていた。シャインの出す覇気に押されている。

しかし、シャインが本気を出した時、同時にギンガ団のアジト、コスモエネルギーが。トバリシテイが、シンオウが、全てが……明け方にも関わらず揺れた。何も揺れたのは大地だけではない。空も揺れた。

「さあ、潰すとするか……」

シャインの姿が一瞬にして、消失する。nomind達が辺りを見渡すと、背後にダークバーストを放とうとするシャインがいた。

「一部を消してもダメなら全て滅ぼすまでだ」

否、戦場から一層強い揺れと爆音が響き渡る。今度の揺れはトバリシティだけだった。

シャインの眼前には何も残っていなかった。忌まわしき分身は姿を消した。全て。

「……間違いないようだな……」

無残にも散らかった研究施設と思われる場所を散策すると、隠し部屋を見つける。

その中には、かつて自分があの時いた部屋があった。

（世界は違うかもしれない……。だがはつきりした。あの男……プルトこそが私を……生み出した男）

部屋を出て、クロノの元へ辿り着いたシャイン。

「遅くなったな」

それが第一声だった。

「今すぐファイトエリアに向かうぞ、いいな？」

クロノはシャインにそう告げる。

「ファイトエリア？どこだ、そこは」

「バトルフロンティアってのがあある島にある街さ」

星がシャインの疑問に答える。シャインも理解できた。そして、頷く。

「行くぞ」

クロノの言葉と共に次なる目的地が定まった。
星が小さくシャインに尋ねた。

「ところでさっきの揺れはお宅？」

「……だとしたら？」

「本当に何者？」

星の問いにシャインは鼻で笑い、こう返す。

「近い内に分かるだろうよ。きつとな」

「……謎だらけだよ、お宅は」

星はつまらなそうに、且つシャインの正体に興味を持つように返した。

勿論、今朝に起こった地震のような揺れがトップニュースに上がったのは言うまでも無い。それがシャインによるもので、且つ覇気による地震だという事を知っているのはシャインだけだったかもしれない。

1-7 知る正体と揺れる世界（後書き）

シャイン「結局、私を作ったのはどこの世界かは知らんが、プル
トということか」

そうっすね。

ミュウツーの本気をかなり久々に書いたけど、何かドラオンボ
ルみたいに力が伸びまくり（滝汗）

シャイン「自業自得だ」

分かってますって・・・

1-8 絶対を破る術（前書き）

今回はかなり短いです。

シャイン「なら、内容は濃いのだろうか？」

いや、そこまで濃くは無いかも・・・。

シャイン「オイ（怒）」

1-8 絶対を破る術

シャインは星のフライゴンの背にいた。目指す先はファイトエリア。そこから經由する事で、ハードマウンテンという山に行くらしい。全て情報屋が教えてくれた。一方、クロノは決意を固めているように見えた。

しかし、それが固まるものとはいえず、まやかしだという事にシャインはとうの昔から気付いている。人間、というのはそういうものなのだ。自らの名を出した事でリメットになったのはこの世界の地理がさらによく分かるようになった程度。それでも充分であった。情報屋の知識は幅広い。名を出す事でそれが何とかなるなら別に構わなかったのである。

さて、当の本人はローブの中で腕組みをして考え事をしていた。『力場』を破る方法を探しているのだ。見る限り、自分の本気の一撃をお見舞いすれば、あれはきっと壊れるだろう。しかし、クロノ達が壊せなかったら意味が無くなる。自然と頭を働かせていた。

（何故だ……人は憎い。そんな生命体だったはず……。何故、こいつらのために知恵を出そうとする？）

シャイン自身に生まれる迷い。しかし、迷いを断ち切るのが簡単な事ではないくらい、分かっていた。力場を破壊するために、迷いを断ち切るために、彼はひたすら試行錯誤を繰り返す。到着するまで後3時間足らず。

「星、紙と書ける物はあるか？」

「何考えてんの、お宅？」

「例のガードを破る方法を探すために、頭でイメージするよりは書

くべきだと思ってな」

しかし、星はこう返す。

「でも、アレは『ルール』ってやつを利用して作ったんだろ？どうすんの？」

シャインは軽い笑みを作る。そして、こう返した。

「『ルール』とはいえ、それは絶対ではない。私の力が100%誰にも敵わないワケではないというのと同じだ」

「どういう事？」

「ギンガ団やロケット団は絶対捕まらないわけではない、というのと同じ事だ」

「……ほいほい。分かりました、ほれ」

観念したかのように、星は懷から紙と鉛筆を取り出した。一体どこに隠し持っていたのだろうか。シャインはそんな事は考えずに、それらを受け取り、立体的な立方体を書いた。書くど、鉛筆を紙の上に置いた。

（『絶対』などありはしない。必ず……あるはずだ……ん？）

ふと考えると、自分の書いた立方体が右寄りで変な形状になっているのに気付いた。慌てて、書き直そうとすると不意に感じた事があった。

（――！　そういえば、やつらのあの力場は綺麗な形だった……つまり、アレもまた……）

それが分かると、フツと鼻で笑う。見えた。あの力場が、弱点もまた。

「どうした？」

「やはり、思った通り。あの力場は『ルール』に干渉したとはいえ、あれも結局はエネルギーの密集体。弱点はあったわけだ」

「へえ、その弱点って？」

「よし、お前には教えておこう……」

耳打ちで話すシャイン。それが星の耳に入る。星も納得したようにうんうんと頷いた。それが終わると、シャインは口を閉ざした。彼もまた、来るべき決戦に備える。

「見えてきた！」

星がそう言った。彼らの目に映るは、活火山の姿。その山道に着陸する。

決戦の時はもう、すぐそこまで迫っていた。そして、シャインの中で今までの価値観と考えが変化の兆しに達していたのである――。

1 一終 旅の終焉（前書き）

今回でこの物語もおしまいです。

今回は今までで一番長い文章になりました。

1 一終 旅の終焉

荒れた岩道を進むとGというログが付いたへりがあった。それが追っているギンガ団なのは間違いない。

クロノが中に入るものの、中はすでに蛻もぬけの空だったようである。それから導き出される堪えは1つ。

「奴らは、もう火山内だ。我らも急ぐぞ」

「言われるまでもない。……楽に死ねると思うなよ……！」

シャインはクロノに促し、ハードマウンテン内にその歩を進める一同。その道のりには2つの種類の足跡があった。1つは人、もう1つは恐らくnomindの。シャイン自身も自らの真実を見つけることが出来るかもしれない。

そう思うと自然とその足は速くなる。クロノもまた、その歩は速くなっていった。きっと私怨だというのはどこかで理解している。自らに似ているが故に「そのまま進め」という気持ちと「もう、休め」という止める気持ちの2つが複雑に交差していた。勿論、前者は始めの彼の感情、後者はこの旅で目覚めた彼の中の感情。

歩くと、ようやくその大本命の男を見つけた。そう、プルートを。クロノとプルートのやり取り。それを見ている中で見える者ひとのあまりに醜い部分。

自らを守るために何かを出し、そして許せないが故にその身を裂かせるトレーナー。nomindを苛立ちで消し去ったが、その先のやり取りは最早、口で語る気にもならなかった。やがてその感情が自然と口に出る。

「人とは醜いな」

その一言。彼がポケモンであるが故に言える本音。星がすかさずこう返す。

「そうねえ。少なからず、人は弱い生き物だね。一人だと何にも出来ないし、かといって群れを作ればそれを嫌う。ほんと面倒な生き物だよ」

その一言はまるで、傍観者のような言葉。

「……貴様はなぜ、クロノについてきた？裏切った罪滅ぼしか？」
「それも有る。でも、本当は何でだろうね？青年についていけば何が分かる、そう思って付いてきた。おっさんが探してる答えが」

星がクロノについてきた理由はとてもあやふやなものだ。しかし、結局今の自分もあやふやで中途半端だという事を考えれば、共感できる。結論こたえが出るのは近い、それだけはどこことなく感じている。

そして、クロノが気絶したプルトの身柄を溶岩の中に放り投げた。この人間は消えた——そう思った矢先にピジョットがプルトを助け、入口に身柄を運ぶ。そこにいたのはいつか見たクリアス、という人間だった。いや、正しくはクリアスとその他大勢。クリアス以外には何の興味も無かった。だが、ふと誰にも悟られぬようにその中のうちの1人が少女を背負っていた。

この少女、一体何者だ——そんな感情が湧き上がるのに時間はかからない。クロノがクリアスにプルトの身柄を引き渡すよう、要求した。当然、クロノを止めようとするクリアスが渡すわけがない。

「クロノ。もう止めろ。アカネくんも泣いているぞ」

1人の老人がクロノにそう諭す。少女――アカネを背負っていた男がアカネを下ろし、抱きかかえ、クロノに見せた。

「……………お前たちは何がしたいんだ？アカネをこんなところに連れてきて。俺を止めるための道具みたいに扱って。まるで脅迫だな」

クロノが首を傾げ、クリアスに言った。しかし、クリアスがその意見に反発する。

「違います！彼女にも今の貴方を見てもらうためにここにきていたただけです！」

「で？アカネが俺を見て、何が変わった？言ってみろ。ギンガ団が壊滅したか？アカネが目覚めましたか？」

クリアスとクロノのやり取りからこの少女を連れてきて、事態の解決を図ろうとしたのは直ぐに分かった。だが、事態を良くするどころか、寧ろ悪化させていた。

「もう良い。お前らも消えろ……。ギンガ団もろとも。俺が、消してやるよ……」

その一言。彼は――クロノは『クロノ』でいられなくなる。発狂とはまた別物でもあった。人間の未熟さを笑う事はない。それこそが人なのだと、彼の中での定理が確信になったから。だが、彼を知る者はそんな現実綺麗に受け入れられるはずがない。

以前、洞穴でクロノのポケモン、ガレスはクロノに仕える意志を彼に話した。そこから考えれば、恐らく彼らがクロノを見限る事はない。そんな事を考える中、クロノはクリアスに言った。

「来いよ、クリアス……。殺りあおうぜ？」

「……貴方はもう私たちの知るクロノではないのですね。……参ります！！」

「来いよ……！」

クロノのポケモン、バシャーモのガレスがクロノと共に前へ出る。そして、クリアスはエンペルトとミュウツーを出した。

（ほう、どうやら激突は免れそうに無いな……）

軽く笑みを浮かべるシャイン。彼がその気にさえなれば、ここにいる全員吹き飛ばすなど簡単な事である。さて、この状態でどう戦うかを現実味に考えていたとき、クリアスのミュウツーが口にしたのはとんでもない言葉。

「そろそろ、そのローブをとったらどうだ？ 異世界の我よ」

（――！ こいつ……どうやら、言い逃れは出来そうに無いな）

当然、その場にいた全員が耳を疑う。軽く、誰にも聞こえぬように笑い声を零しながら、観念したかのようにシャインはそのローブを脱ぎ捨てた。彼らの前に対峙する2人のミュウツー。

「あの時の借りを返してやる。来い！」

「ふっ。無駄な事を……！」

否、同時に宙を舞う2人。ローブを羽織っていたから、ある程度のパワーセーブをする必要があったものの、もうその必要はない。本気で叩き潰せる、シャインは再び合間見えた強敵と認める存在との戦いを楽しむ気だ。

「では、そちらからくるがいい」

「相変わらず、余裕そうだな……」

クリアスのミュウツ―は皮肉そうにそう言い返す。だが、彼から放たれたのは予想外の一発。

「見せてやる、ダークブラスター……!!」

「何ッ!？」

クリアスのミュウツ―の手に集まるシャドーボールのエネルギー。それを見事なまでにサイコネシスでコントロールし、莫大なエネルギーとして放つ。元はシャインが使う最強の技。それを使ってくるなど夢にも思っていない。

「くっ、ならばこちらも!」

シャインもまた、ダークブラスターを放つ。激突する2つの闇の力。さすがにクリアスのミュウツ―のは出来たばかりで長時間は持たないようで、少し耐久してものの、シャインの一撃に力負けした。だが、相手も中々のやり手。直撃の寸前に直撃だけは免れていた前回と違い、今回はその一撃をうまく避ける。

「まさか、ダークブラスターを使ってくるとはな……驚いたぞ」

「貴殿が出来るのに、我が出来ないというのはおかしいだろう?」

「確かに言える。だが、まだまだだ。ダークブラスターは手のブレ1つでパワーが大きく変わる技。それは立案者の私が言うのだから、間違いはあるまい」

「貴殿の言う通り、そこまで身につけるには苦勞した」

苦勞した、とクリアスのミュウツ―は答えた。だが、見よう見真似でこの技は簡単に真似できない。クリアスのミュウツ―の技

量の高さが伺えた。

もう、手加減は必要ない——そう判断したシャイン。その旨を口にする。

「貴様は素晴らしい。故に、もう手加減はせん。全力で潰させてもらう！」

「来い！！」

否、クリアスのミュウツの背に動くシャイン。勿論、当人は見えずその速さは鬼神の如き。その拳には炎、雷、氷の3つのパワーが瞬間的に込められていた。

「ゆくぞ、三重拳！！」
トライアングル・ナックル

「ぐっ……！？」

瞬間的速度の攻撃。当然、反応できていないクリアスのミュウツが避けられるわけがなく、壁に叩きつけられる。本気なだけあり、この一撃でもう限界なのは息遣い、体の傷などをいくつか見るだけでそれが領けた。

「……どうやらここまでのようだな」

「ま、まだ戦える……」

「無理を言う。貴様の体力が今の一撃で限界なのは目に見えている。すまないが、止めを刺させてもらおう……さらばだ、同胞よ」

シャインが止めの一撃——ダークブラスターを放とうとした瞬間、ハードマウンテンに歌声が響き渡った。勿論、唐突な事にシャインの手も止まる。彼だけではなく、全ての者が指示の手を止め、その歌声を耳に入れていた。

それがあのアカネ、という少女の歌声。美しいハーモニーが自然

と囃み出て、その音色は戦う者の気持ちを和らげる。歌を歌い終わると、アカネがその場に倒れそうになるが、その前にクロノが彼女を支えた。離れていても分かった。

（バカな……。アイツの闇が消え去った、とでも言うのか……。!?）

クロノからは邪気を一切感じなくなっていた。いや、今までの彼は偽りの姿で、これこそが彼の^{すべて}真実。そう考えるしか今のシャインに道は残されていなかった。

そして、出る彼女の心からの叫び。その全てをその場にいた全員が聞いた。

辛い時は誰しもある。だが、共に仲間がいるからこそ乗り越えられる。

辛さを分か合うために友はいる。

「全く……。お譲ちゃんは女神か、聖女だね」

そう、星は頭を掻き毟りいつもの口調で話した。一方、シャインは未だに信じられなかった。自分もだが、アカネの声1つで全てに決着が着いた。まるで星の言う通り、女神か聖女か……。

自然とそれが口に出る。

「……あの女。何か特別な力でも有るのか」

「いいや。彼女は何もしていない。これが人が持つ力の断片だ。たしかに、人は愚かしい生き物だ。しかし、良きパートナーに出会えた時、我々ポケモンは。いや、人とポケモンは新しい道を歩けると、私は信じている」

そして、クリアスのミュウツーがシャインに傷ついた体を引きず

って近づき、こう言った。

「……今のクロノならば、貴殿の得たい答えを教えてくださいと思うぞ」

（……答え、か）

それを聞くなり、静かにクロノとアカネの元に近づくシャイン。確かに今の彼なら、望む答えを出してくれるはず。しかし、それが本当に彼にとって有益なものになるかは別物なのだが。

「お前は、シャインの方か？」

クロノがこちらの目を見て問う。今思えば、こうやってまともに話すのはこれが最初で最後なのかもしれない。シャインは黙って首を縦に頷かせるところ聞いた。

あの時と、同じ質問を。

「クロノ、今一度聞きたい。人とポケモンは、なぜ生きている。我々は共に生きていけるのか？」

「……人間は愚かな生き物だ。俺がそうだったように、すごく不安定で、他の命を簡単に犠牲にする。でも、人が間違った道に進んだ時、ポケモン達がそれを正してくれる。人も同じだ。ポケモン達が間違ったら、人がそれを直す。……こうやって人とポケモンは今まで歩いてきたと思う。今だったら言える。人もポケモンも、手をつなげば一緒に歩いて行ける！」

それがクロノの答え。ただ、純粹に『悪』を消す事だけを考えてわけではないのは直ぐに分かった。だが、もう1つ……聞いておきたい事があった。

それは今の自分の現状を語っているようなものでもあった。

「では、もうひとつ聞こう。クロノ、貴様は闇の落ちかけた。だからこそ聞きたい。闇とはなんだ？」

「……闇は誰でも持っているものだ。闇に落ちた時、全部ふっきれた気がした。すごく楽になれた。でも、闇の先には何もない。辛さも、痛みも何もないかった。でも、それだけだった。……そして、分かったんだ。闇はもう一つの自分だってことが。まるで太陽と月のようにどっちかが無くてはいけない。どっちだけが居てもいけない。そして、両方の自分と向き合えた時、ようやく見えるものも有るってことが」

闇も自分。それが彼の――クロノの答え。シャインは心の底で笑みを浮かべた。そして、同時に感じ取った。――潮時だと。

（私の中で、答えは見つかっていない……。だが、こいつらは私の中の『人間』を大きく変えた。フツ、共存か……。あながち、間違いないのかもな）

そして、クロノにこう言った。

「そうか。……お前と旅ができた事、この世界に來た事も何かしらの運命だと思うぞ」

自然と何かが変わっていた。『貴様』が『お前』に変わっていたのだ。気付いていたのか、気付いていないのかは当の本人にすら分からない。だが、彼の中で大きな変化が訪れていた。それは言える。

「何言ってるんだよ」

否、シャインは空間のゲートを切り開いた。お忘れかもしれないが、彼には時の神ディアルガ、空間の神パルキアの力が微量ながらも備わっている。その力はどうか増幅し、単匹なら異世界を回れるようになったのが伺える。

そして、別れ際の挨拶と言わんばかりにこう言った。

「どうやら、私の旅はここまでのようだ。……クロノ、お前の事は生涯忘れる事はないだろ」

「俺もだ……。またな、シャイン」

クロノが手を差し出そうとする中、シャインはゲートの中に入った。彼にもその手は見えていた。だが、握手したい気持ちもあったのに関わらず、しなかった。それは一期一会故。

もう、交わる事もない2つの存在の決別、それを意味していた。だが、この旅は彼の脳裏に深く刻まれる。

ゲートを通ると、数々の異世界が存在する空間の狭間に入った。元の世界に帰ろうとするシャイン。そんな時、この空間に若干干渉する力が現れる。

「ん？このルート。私の世界とは違う……」

それはクロノ達の世界に似て、同時に強大な力を彼は感じた。そこへ入ってみるシャイン。それが興味本位なのは言うまでもない。

その世界は無。それしか言えなかった。時も空間も流れつつも、その力は失われており、何もしていないに等しかった。そして、シャインは対峙した。その強大な力を持った主と。

「異界の者が何故ここに来た？」

「私の帰り道にこの世界が干渉してきてな。単なる興味本位だ」

シャインはその者の力を目の当たりにした。戦わなくても分かる。自身と互角——いや、最悪それ以上も有り得た。それほどの力の主だ。

これほどの力の主。それがクロノ達の世界の神の1人なのは理解でき、伝言を託す事にした。

「まあいい。貴様らに言っておきたい事が有る」

「……何だ？」

「クロノ達を今一度信じていてほしい。あいつはすごく不安定で、他人を第一に考える人間だ。私が知っている人間とは何かが違う。ゆえに、まだ見限らないでほしい」

それがこの旅を続けた中での答えの1つ。正確な答え、というものは出来ていないがただ今のクロノはこの世界の神からいつ見限られてもおかしくない状態だ。仮に彼が元に戻ったとしても。

ここまでやってくれたのだ。こちらもこのような形で礼を少しは返さなければ気が晴れない。というのが本音である。勿論、それが彼の表面上の理由なのはすぐに分かった。その心の内はどう思っているか——それは本人にしか分からないだろう。

「ほう……。人を嫌悪していた物の言葉とは思えないな。……あの人間と出会って貴殿も何か変わったようだな。……良かろう。我をはじめとした、この世界の神々を説得しておこう」

「一応感謝しておこう」

それが今の彼の本音。ただ、それだけが零れる。主が口を開いた。

「さて、ここにあまり長居されると、他の者がうるさい。貴殿の帰

り道をより確実にするため我も手を貸そう」

そう言うのと、主の力により再び開くゲート。静かにゲートに歩み寄り、それに潜ろうとした時、シャインは聞きたくなった。自分と互角までの実力ちからを秘める者の名を。

「……最後に聞きたい。貴様の名は？」

「アルセウスだ。太陽の名をもつ者よ。……貴公の旅儀に幸多からん事を」

ゲートは一気に彼の元いた世界まで引き戻してくれた。彼の降り立ったのは、例の異世界転送装置の前。

『そ、総帥!!!!』

「……世話をかけたな」

ただ、それだけを口にするとシャイン——ミュウツ—は自室に足を運んだ。その道中、グロスに問われる。

「総帥、ご無事でなによりです」

「グロスよ、これから宜しく頼む。……少し疲れた。休む」
「ハッ」

勿論、これは嘘に等しい。自室に入り、椅子に腰掛けるミュウツ—。脳裏から離れぬクロノ達。

「お前達の事は忘れはせん。絶対にな……」

ミュウツ—の眼光は静かにその誓いを確実のものとしていた。彼の中で見出される答え。

その全てが明かされる日はそう、遠くない未来である――。

1 一終 旅の終焉（後書き）

キシさん、今回のコラボをしてくださって、本当にありがとうございます。

このような形ですが、お礼を申し上げます。

今後のシャインことミュウツーの行動にご期待下さい。

短いですが、これで挨拶とさせていただきます。

ありがとうございました！！

2-1 新たな一歩（前書き）

久々の復活です。

なお、今回の投稿に伴いまして小説情報を一部変更しました。

今回からは春野ツバサさんの作品、

『ポケモン不思議のダンジョン外伝〜未来の変革者達〜』とコラボさせていただいています。

※今回の話からは一部ポケダン―光と闇の交錯―の内容も混じっていますのでそちらも是非お楽しみ下さい！
では、どうぞ！！

2-1 新たな一歩

受け入れてくれる者がいる。これは単純に嬉しいし、励みになる。しかし、その真逆——受け入れない者がいたら、自分は必要とされているのか、という事を考えざるを得ない。

ならば単純に私は問おう。

私は、この世界に、この世界の者達に必要とされているのか——。いや、答えなど聞かずとも分かる。

NO。たったこれだけだ。災厄をかつて巻き起こし、そしてまた再び災厄を巻き起こそうとしている自分を必要などと言う者はいない。皆、世界は厄介者を避けるのだ。精々、同じような野心を持つ者くらいだろう、私の元に集うのは。

私が必要とするのは力。全てを支配できる絶対的な力が私には欲しい。だが、如何せん私は心の中で迷いのようなものが存在していた。それは彼——クロノという少年達との出会いだ。

私は復讐心と怒りしかなかった。なのに、だのに彼は、そんな私と道中を共にした。当然、私が自身の正体を隠していたのが原因なのは分かっているがそれでも彼には色々と教えられた。

そして、私は知りたくなった。世界を。しかし、そんな事を今になって言うのも癪に障る。まず私の部下はどうする？

そしてもう1つ。私を倒そうと動いている者がいる以上、この可能性の種を潰しておく必要がある。どちらにせよ、私が今世界を少し探求してみたいと言っても快く賛同してくれる者は誰もいない。

それもいい。それが人間に、プルートに、憎き男に生み出された私の運命なのだから。

そして、チャンスは訪れた。それはグロスが私に2度目の転送装置の実験をする、と告げた時。私はこれをラストチャンスにするつもりだった。もう、旅はできない。

この旅の後に私は生きるか死ぬか、どちらかしかない事を既に腹をくくっていた。

最も、今私が生きていることは本来、驚かれるべき事なのだ。私は誰にもこの事を語るつもりは無い。仲間になったデルタ達にも――。

あれはこちらの世界で半年と一月ほど前の事になる。

＊

ミュウツー――否、シャインは異世界に渡っていた。

しかし、世界は黒く、灰色で何もかもが静止している。かつてダイクライと手を結んだ頃に聞いた事があるので簡単な前知識だけは入っていた。

“暗黒の未来世界”――そう呼ばれる世界らしい。最も、この世界はシャインとは違う世界。異世界にも同じものがある、というのは興味深かった。

何故かは分からないが、また、ローブを身に着けていた。白昼堂々と自らの姿をおめおめと晒したくは無い。今回はそっちの意味合いが強かった。

もっとも――この世界はポケモンだけが住む世界。ニンゲンなどは一切存在しない世界である。するだけ無駄なのかもしれない、とこの時彼は思った。

だが、この後の事を考えればこれはこれで正解だったのかもしれない、と思うのである。

「……………」

ある木の前まで止まると、その木に彼は静かに触れた。このどうにも不思議な感覚は慣れそうにない。

だが、感慨深い。このような珍しい経験はそうそう出来はしない。

「——話には聞いていたが、直接この目で見るのは初めてだな。実際に見るとなんとも言えないものを感じるな」

そんな事を呟くと、その木に夢中になったかのように静かになった。

そんな時、背後から何者かの気配がしたのである。

(……何か感じるな……。足音からして大型のポケモンか)

そして息づかいからして距離もそんなに空いていない。チラリ、と背後を覗けば、案の定大型のポケモンだった。

ポケモンは黒の配色の強い灰色をベースに体の随所——ツメや頭部は銀色に光っており、肝心の頭部には2本の角の生やしたポケモン、ボスゴドラ。

しかし、正直気にする事も無かった。彼の常識を逸脱した能力の高さからすれば例えボスゴドラといえど、一撃でKOできる。

いや、そもそも相手にするだけ無駄、というべきか。

それゆえにボスゴドラの威嚇すら全くなんのその。だが、肝心の本体はそれに耐え切れなかったのかそのツメを振り下ろそうとする。

もつとも、彼は^{シャイン}ポケモンだ。空を切ろうとする音など瞬間的に理

解できる。ゆえに——ため息を吐いてから、ボスゴドラの方へと振り向く。

シャインの目つきにボスゴドラは瞬発的に動きを止める。その目つきに凄まじい威圧感が込められていることくらい、一目瞭然である。

そして、静かに一言、これだけボスゴドラに言い放つ。

「——失せろ」

その一言にボスゴドラは戦意を喪失したのだろうか、慌てた様子で逃げていった。

大型のポケモンとはいえど、所詮はこの程度である。ため息を吐くと、彼は歩こうとする。まさにその時——

遠くではないが、何かを感じ取った。争いの気配。動きを止め、自然とその方角へ足を向けていた。

興味、好奇心。そういうえばあの時も——クロノと出会った時も同様だったと思う。

「——こんな世界でも元気に動き回っている奴はいる——か」

そして、彼は続いてこう呟いた。

「ついでだ。少し様子を見に行くとするか。

暗く閉ざされたこの世界でも、生きる意志を失っていない、変わり者の顔をな」

笑みを浮かべながら、彼は歩き出す。だが、当然この時の彼の行動を責めることなどできるまい。

全ての動物とて、興味あることに首を突っ込みたくなるのは最早

自然の摂理といえる。

彼もまた、それに従っただけのことなのだから――。

＊

どれほど歩いただろうか？

いや、そこまで歩いてはいまい。精々10分、いや15分程度か。時が壊れるというのはこういう時に面倒だ。改めるとこれは色々興味深い。まあ――もつとも、もう私にはどうしようも出来ないし、解決策などを考える気もならない。

世界がその破滅を選んだ。私はただ一言で結論づける。

もつとも、世界なんてものは全ての生きとし生ける命の中にあるものだ。時が崩壊^{こわ}れようが個人個人にはそこまで関係はない。

関係ある、という意見もあるだろうがそれはあくまで今までのリズムが壊れるが故のこと。結局は馴れ、という事だ。

まあ、私も100年近くずっと力を蓄えていたからそのリズムに馴れた70年近くは比較的楽観的だったが、始めの30年近くは退屈だった上に思い通りに動かない我が肉体を強く憎んだものだ。だが、いつになっても引つかかる。誰が私を助けた？

あの時。ダークライの部下たちに抑えられ、私はあの異空間の消滅と共に消えたはずだった。しかし、気付いてみれば真っ黒な闇の中にいた。体は全く動かないし、全身が激痛で痛んだ。

そういえば、夢の中だったか……変な事を私に告げていたヤツがいたな。確か、

「二度目は無い。今回はイレギュラーだと思うがいい。そして――再びまた暴れるがよい、破壊者よ」

などと言っていた。不思議なものだ。私は誰かに管理でもされているのか？

バカバカしい。

そんな事を私は色々と考えていたが、気付けばもう激戦区に入っていた。意識を集中させすぎたか。

そして、私の眼下に広がるポケモン——あれは確かヤマミ。集団で襲うとは、まるで盗賊だな。

それに応戦しているのはキモリと——

「ッ!？」

私はその瞬間、目を見張った。

一度瞬間的に目を閉じてもう1回その光景を見るが現実には間違いない。こんな場所にいるはずがないッ！

いや——私はうっかりしていたじゃないか。ここは異世界^{パラレルワールド}。予期せぬ可能性など有り得るという事を。

そして、私はその存在を今一度その目に焼き付ける。

その人物は女だった。いや、女というよりは少女とも言えるべきか。それは勿論、人によって見方は大きく変わるだろう——が。

しかし、それでもキモリやヤマミの倍以上はある。栗色の髪に頭に白地にピンク色のリボンが巻かれたブレードハットを被っており、首元には青色のマフラーを巻き、袖無しのノースリーブシャツに水色のスカートにブーツ。左肩から白いショルダーバッグを下げていたその少女が——そこにはいた。

また、か——。

そんなどこか腑抜けた感覚で私はその場に、戦場に静かに佇んでいた。

この少女がなぜ、ここにいるのか——当時の私はあまり意識していないが、今になってみればかつて私の邪魔をしたレッカというヒコザルは元々ダークライの野望も阻止している。

そして、そのレッカは未来から来ていた元人間。つまり、異世界でいうレッカのような存在の人物がそこにはいたことになる。もともと、レッカと同じ人格ではないから性格などもまるっきり違う。

少なくともいえるのは、その存在に立つこの世界のニンゲンがこの少女であったという事くらいだった。

2-1 新たな一步（後書き）

久々の主役ですねえ（笑）

シャイン「そうだな」

この小説では常にミュウツーをシャイン、と呼びますので改めまして宜しくお願いします。
では、また次回！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5128i/>

運命と変革～異世界で見た景色～

2010年12月25日00時43分発行